

氏 名	屋 宜 久美子
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 300 号
学位授与年月日	平 成 22 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉葬華－誕華 〈論文〉美術作品制作における個人の表現の普遍性－カラー・フィールド・ ペインティングにおける作家と世界のつながり－
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 木 津 文 哉
（論文第 1 副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 小 松 佳代子
（作品第 1 副査）	〃 教 授 （ 〃 ） 本 郷 寛
（副査）	〃 〃 （ 〃 ） 渡 辺 好 明

(論文内容の要旨)

本論文は、自己の制作を振り返る過程において、私自身が制作の中で向き合っているものが非常に個人的なことであるのに、なぜ私は他者へと発表することも目的の内に含んでいる制作を続けるのかという問題意識から、個人の表現がいかにして普遍性へと突き抜けていくのかを考察したものである。

第1章では、自己の制作手法とその意味について述べた。自己の制作を丁寧に述べることによって、制作において絵の具の流動性、制作行為の魅力、心的変化が重要な要素となっていることを明らかにした。また、これらの要素が持つ意味についても具体的に考察を行った。絵の具の流動性が持つ意味については、過去から現在の制作に至るまでの素材の選択や手法への工夫を振り返ることによって、その必然性を明らかにした。また、絵の具の流動性の持つ魅力が、画面と対峙する時の緊張感や驚き、絵の具自体の生命を感じられるところにあることも明らかにした。制作行為の魅力については、子どもの遊びを手掛かりとしながら考察を行った。意味や目的に回収されることのない純粋な行為である遊びは、日常とは別の次元で起こるものであり、制作において作家が表現世界へと没入している時間と非常に近い特徴を持っている。遊びの中でどのようなことが起きているのかを考察することによって、制作行為が魅力的と感じられる理由について明らかにした。さらに、アートセラピーにおける心的変化の過程を見ることで、制作において自己では意識しにくい心的変化について考えた。そして、制作における心的変化が、自己と世界との深い繋がり の現われであることを明らかにした。

第2章では、カラー・フィールド・ペインティングの作家であるバーネット・ニューマン、マーク・ロスコ、モーリス・ルイスの制作と作品を取り上げ、作家が制作において対峙していることについて考察を行った。まず、ニューマンの作品をジップによる作品とそれ以前の作品やドローイングと比較することによって、ジップに込められた意味を考えていった。また、ロスコのシーグラム壁画をそのスケッチと合わせて見ることによって、彼が作品と展示場所との関係をどのように考えていたのかを明らかにした。さらに、ルイスのヴェール作品における手法の持つ意味を探ることで、彼が制作において向き合っていたものについて考えていった。彼ら三者の制作を、モチーフ、場所、手法という観点からそれぞれ見ていくことを通して、作家が制作において、生命と対峙していたことを導き出した。

第3章では、第2章で述べた大きな連鎖の中に位置づけられる「生命」や子どもの遊び、溶解体験やスタイル化を切り口とし、美術作品がどのように個人の表現を突き抜けて、普遍性へとたどり着くのかを考察した。まず、美術作品制作とはどのような活動なのかを考えていった。制作において生命と向き

合うことができる理由を、作家が純粋な客体への関心へと開かれているとし、そのことを子どもの遊びにおけるパラドックスを乗り越える力や、世界への全身的な没入という体験を通して述べた。また、それは制作が主体と客体が溶け合う時間を含むからこそ可能になることを明らかにした。次に、作品のスタイル化がどのように表現の自由と結びついているのかについて、遊びにおける模倣、型、行為の無意識化をキーワードとしながら考察した。作家の制作におけるスタイル化を中心に見ていくことで、それが作家にとって世界と向き合う為の基準線となり得ることを明らかにした。さらに、美術作品が環境や時代を超えて他者と感情の共有を生み、普遍性へと突き抜けていく理由について考察を行った。作家は制作において日常世界から切り離された高次の場所を通り、さらに自らの原風景となる場所に抜けて、ふたたび日常の世界へと戻ってくる。このような作家の制作における時間は自己が生きられた場所と出会い直すことを可能にさせ、そのことが作品に生命が躍動するような強さを与える。このような躍動が観者にも迫ってくことで、観者も自らの原風景と出会うような体験をする。作家の原風景と観者の原風景が重なる場所にこそ、普遍性が宿ることを結論とした。

本論文には三つの意義があると考ええる。すなわち、自己についての意義、制作者についての意義、観者についての意義である。まず自己についての意義とは、作品制作が自己の存在を世界へと「生きづく」ものとしていることに気づくことができたことである。自己が世界に「生きづく」とは、制作の中で自己にとって非常に大切なことと向き合うからこそ可能になるものであった。制作者についての意義とは、制作において生命に触れることにより、自己の存在をかけがえのないものとして感じられるということが明らかになったことである。生命との出会いによって、世界の中に「生きづく」自己を感じることは、私たちがよりよく生きていく為に欠かすことができないものである。観者についての意義とは、作品と対峙することによって新鮮な感覚を持ち、世界と出会い直すことができるからこそ、他者の表現に心が動かされることがわかったことである。意味や目的に回収されない時間に触れることで、観者は生命の躍動を感受することができ、それが世界との新たな出会いを可能にさせる。このように、制作者、観者という立場の違いに左右されることなく、美術作品が人を世界へと「生きづく」ものとする点を見出した点が、本論文の意義である。

(博士論文審査結果の要旨)

提出論文は、美術作品制作は本来非常に個人的な営みであるにも拘わらず、観る人に深い感動を与え得るのはなぜなのかという問題意識から、個人の表現が普遍性をもつ機制を明らかにしたものである。美術作品は制作者にとって、自らがこの世界とつながりをもっているという確かな存在感を与え、同時にそれに触れた観者にも世界と出会い直すような経験を与えることを明らかにして、爽やかな読後感を残す好論文である。

筆者は、水で薄く希釈したアクリル絵の具を画面の上に流し、パネル自体を動かして絵の具の流動性によって色面に深い趣を出す制作手法をとっている。このような制作手法に至った経緯とともに、その制作手法が作家自身にもたらす没我感、心的変容といった、言葉では捉えにくい側面を教育哲学や心理学などの知見を借りながら丁寧に記述している。さらに、自らの制作手法と近いカラー・フィールド・ペインティングの作家である、バーネット・ニューマン、マーク・ロスコ、モーリス・ルイスの作品について、ドローイングと作品との比較や、作品の下絵、制作環境などから、それぞれの作家が制作において向き合っていた世界観をあぶり出す作業を行っている。大きな色面で構成された画面に託されたのは、かけがえのない生命への感受、人間の根源的な感情、世界とのつながりといった、人間の存在を根拠づける深い思いであったことを見いだした。単なる作品批評ではなく、これらの作家と同様の制作に携わっている筆者だからこそ見出し得た知見である。人間の存在を根拠づけるような作品について、筆者は、世界に「根付く」ことで生命感を得る、つまり「息づく」ことができるという意味で、「生きづく」

という独自の概念によって理解しようとする。筆者によれば、カラー・フィールド・ペインティングは、世界に「生きづく」絵画であり、それゆえに観者に深い安らぎを与えるものであるということになる。こうした考察をもとに、最終章では、個人の表現が普遍性へとつながる機制について、再び美術作品制作において生じていることを丁寧に分析することによって明らかにしている。制作が子どもの遊びと同様に、対象への純粋な関心に導かれて日常世界を超えた高次の次元に至る営みだからこそ、環境や時代の違いを超えて、そこに託された思いが共有され、観る人に感動をもたらすのだということを説得的に論じている。

美術の制作・鑑賞が人間の感情にどのように働きかけるものかという難しい問題について、自問を繰り返しながら、緻密に記述を重ねていくことで、作家の実感にとどまらない客観性をもった美術制作分析の論文となり得た。博士論文公開審査会においても、丁寧な分析に基づいた論理構成によって、聞き手にもそのことが十分伝わっていた。以上のような点において、課程博士論文として優れたものであることを審査員全員一致で高く評価し、合格と判定した。

（作品審査結果の要旨）

審査の対象となった作品は、「葬華－誕華」と題された一点が縦197cm、横333cmの二点一組の絵画作品である。作品に描かれているものは、原初生命体のヌクレオチドを育ててきた原始地球の熱湯の海のようにであり、作者が育ててきた沖縄の海のようにでもある。

大きな画面を通して、自然な深みのある空間を創り出し、人間の存在を深層的に表現しようと試みている。

入学以来、一貫して描こうとしてきたものは本人一流の死生観であり生命の本質である。

本作は一貫して取り組んできたそうしたテーマの到達点といえる作品であり、その支持体の大きさも必然性のあるものとなって完成している。

技術的には顔料のたらし込みによる一瞬の輝きを定着させる試みを繰り返し、結果として清々しい画面を構築することとなった。絵の具に自身の心を託して地道に積み重ねていく手法で、何層にも重ねられた複雑な色面からは、作者独特の作意を超えた美しさを感じ取ることが出来る。

制作において刻々と変わる心の変化の中で、制作者としての自身の精神状態を維持しながらも、描く行為からの自然な結実を待ち続ける。こうした制作姿勢によって生み出された画面からは、祈りにも似た、何かに導かれるような衝動を感じさせる。

博士課程での在籍3年間の制作を通して、また、理論研究の内容を通して、作者自身の追求の視点は一貫していた。作品の完成に集中力を途切れさせることなく、制作に向かう真摯な制作姿勢は、審査委員全てが評価するところである。また、この作品は提出された論文や課程博士在学中の研究の上に成り立った作品であるとして、審査の過程において、今まで培われた制作の力量を基に、描くことへの研鑽を加え、さらなる人間としての深まりを獲得するであろうことから、将来優れた作家としての期待が持てるとされた。

審査結果として提出された作品は、博士学位作品の質に十分に値する、精神性、技術力に加え、独自性の上に成り立った、存在感のある力作となっているとして高く評価し合格とした。

（総合審査結果の要旨）

提出論文は、美術作品制作は本来非常に個人的な営みであるにも拘わらず、観る人に深い感動を与え得るのはなぜなのかという問題意識から、個人の表現が普遍性をもつ機制を明らかにしたものである。美術作品は制作者にとって、自らがこの世界とつながりをもっているという確かな存在感を与え、同時

にそれに触れた観者にも世界と出会い直すような経験を与えることを明らかにして、爽やかな読後感を残す好論文である。

さらに、自らの制作手法と近いカラー・フィールド・ペインティングの作家である、バーネット・ニューマン、マーク・ロスコ、モーリス・ルイスの作品について、ドローイングと作品との比較や、作品の下絵、制作環境などから、それぞれの作家が制作において向き合っていた世界観をあぶり出す作業を行っている。大きな色面で構成された画面に託されたのは、かけがいのない生命への感受、人間の根源的な感情、世界とのつながりといった、人間の存在を根拠づける深い思いであったことを見いだした。単なる作品批評ではなく、これらの作家と同様の制作に携わっている筆者だからこそ見出し得た知見である。美術の制作・鑑賞が人間の感情にどのように働きかけるものかという難しい問題について、自問を繰り返しながら、緻密に記述を重ねていくことで、作家の実感にとどまらない客観性をもった美術制作分析の論文となり得た。博士論文公開審査会においても、丁寧な分析に基づいた論理構成によって、聞き手にもそのことが十分伝わっていた。以上のような点において、課程博士論文として優れたものであることを審査員全員一致で高く評価された。

提出作品において描かれているものは、原初生命体のヌクレオチドを育ててきた原始地球の熱湯の海のようにあり、作者が育ってきた沖縄の海のようにもある。

大きな画面を通して、自然な深みのある空間を創り出し、人間の存在を深層的に表現しようと試みている。

入学以来、一貫して描こうとしてきたものは本人一流の死生観であり生命の本質である。

本作は一貫して取り組んできたそうしたテーマの到達点といえる作品であり、その支持体の大きさも必然性のあるものとなって完成している。

技術的には顔料のたらし込みによる一瞬の輝きを定着させる試みを繰り返し、結果として清々しい画面を構築することとなった。

美術教育研究室の博士の作品として高度の質を持ち、なおかつ力の入った作品の完成に集中力を途切れさせることなく、制作に向かう真摯な態度とその結果を総合的に評価し、大学院修士後期課程の学生として博士号取得を認めるものである。